



本田第1保育所
藤本保育士

少しだけ、男性保育士ならではの困ったことがあります
立場や作業内容に男女差を感じたことはないそうです。担任が男性保育士であることに、最初は保護者から驚かれることもあるそうです。ただ、時間が経つと保育士としての男女差は感じられなくなり、さらには父親から相談をつけることも多くなるようです。坂田さんは「抱っこするだけで、不安そうにしている子どもをすぐに安心させることができる女性保育士を見て、女性がもともと持ち合わせている母性がうらやましい」と話します。

また、トイレや更衣室が男女兼用になっているところに、戸惑うこともあるそうです。今後、男性保育士が

ダイナミックな遊びはお任せ。男性保育士の良さは
学生時代はスポーツに打ち込んできた皆さんは、体力をいかして、ダイナミックな遊びや力仕事を率先してやることを心にかけているそうです。江崎さんは「日焼けや濡れることは気にならないので、プール遊びも思い切りできます」と女性保育士を気遣います。体力もあって外遊びも得意な藤橋さんは子ども達に鬼ごっこに誘われることが多いとか。坂田さんは「父親目線のスキンシップで、お父さん役が担えるよう心がけている」と子どもの心の成長にも働きかけています。藤本さんは、他の保育士から頼られることにもやりがいを感じているなど、皆さん男性の特徴を生かした部分で保育や保育所に貢献されています。



増えることを考えると、施設の整備が必要なのかもしれません。

今後の目標について、お聞きしました

「保育士1年目ですが、園の力になれるように、行事



で役に立てるようになりたい」と、藤橋さん。「保育士3年目。先輩になることに自覚をもって計画性のある保育を目指したい」と、藤本さん。坂田さんは「幼児期は子どもの成長にとって大切な時期。周りの大人から影響を受けやすい時期でもあるので、自分が身近なヒーローになれるよう、人としてお手本になれる保育士でありたい」とのこと。江崎さんは「男性保育士が増えたので、お互い情報交換をし、「コミュニケーション」とりながら、自分を高めていきたい。また、保育士の仕事に魅力を感じてもらえるように、自分自身が続けていくことも大切だと思つ」とのことです。4人が活躍する中で、今後、保育士を憧れの職業とする男性が増えるでしょう。そして、女性、男性、それぞれの良さを生かした保育を行える保育所の増加が期待できます。



本田第2保育所
藤橋保育士

瑞穂市

男女共同参画社会づくり

ダイナミックな遊びが得意な子どもたちの身近なヒーロー

男性保育士に聞く男女共同参画



瑞穂市では、男女がお互いを尊重し、性別に関りなく個性と能力を活かして充実した生き方ができる社会づくりを目指しています。近年では、保育・子育ての場で活躍する男性が増えていきます。そこで今回は、瑞穂市内の保育所で働く男性保育士4名に日頃感じていることを聞いてみました。

●インタビューは、「もくもくずほ785」担当のフリーアナウンサー武山幸子さんです



南保育・教育センター
江崎保育士

進路を考え始める中学生、高校生で保育士への夢を具体化した4人

幼少期にいとこや近所の小さな子どもとふれあつたことで、子どもと関わるのが好きだと感じていた江崎さん、藤本さん、藤橋さん。中学生の時の幼稚園での職場体験で、子どもたちと一緒に歌ったり、遊んだりすることで保育士という職業にぐっと心を掴まれた坂田さん。藤橋さんも中学生で保育所の職場体験をしており、保育士が楽しく仕事をしている姿を見て、職業にすることを決めたそうです。皆さん、子どもとふれあう経験がきっかけになり、保育士の資格をとるために進学され、現在に至ります。

夢だった保育士になって感じた苦労とやりがい

実際に保育士として働くようになり、日常の活動や行事の準備など、子どもたちからは見えないと



普段の保育の様子

こでの作業に大変さを感じている4人ですが、その大変さは子どもたちの反応があるからこそできることだと言えます。坂田さんは「子どもたちの心の中に自分の存在を感じてくれること」、藤本さんは「一緒に活動することで同じ喜びを得られること」、藤橋さんは「子どもたちの笑顔を見られること」にやりがいを感じています。

保育士8年目になる江崎さんからは「苦労とは感じない」と頼もしい一言。「子どもたちのやる気を尊重して、制限をかけるのびのびと活動してもらっていますが、事故や怪我をしないよう、見極めに配慮しています」。昨日できなかったことが、今日にはできるようになる子どもの成長を間近で見られることが、保育士の特権だと皆さん感じています。



別府保育所
坂田保育士



瑞穂市教育長
加納 博明

「男女共同参画」という言葉が世の中ですでに用いられるようになってから20年は経ちました。

この間、各自治体では様々な取り組みがなされてきました。

そして、男女が本当に自然体で一緒に活動できるようになった場もありますが、まだまだ頑張らなければならない場もあると思います。

しかし、この「男女共同参画」という言葉にこだわることなく、男女が共に社会を作り上げていくという風土はこの20年間の中で確実にできつつあるように思います。

例えば今回、特集された「男性保育士」以前はテレビ等のメディアでも取り上げられる程のニュース性はありました。でも、今は、この記事のように私たちの身近なところでも活躍しています。

この広報では、あえて記事として取り上げていただきましたが、やがて男性保育士がどの保育所にもいることが自然体になる時代が来ると思います。

そういう町にこの瑞穂市が先駆けてなるとステキですね。

頑張れ！男性保育士さん！

そして、思いっきりやりたいことに取り組みんでください！

南保育・教育センター所長 棚瀬 庸子

毎朝、「えさきせんせい、まだ」と出勤を待ち遠しく思い、職員室を覗き込む子ども達。

先生との信頼関係が築かれていることを嬉しく思います。

保育所は、女性が多い職場です。江崎先生が瑞穂市に採用され、牛牧第1保育所で勤務を始めた頃、黒一点で大丈夫かなと心配をしました。本人自身も不安や苦労があったかと思いますが、早い時期から保護者や先輩保育士と上手くコミュニケーションが取れている様子を見て、安堵したことを覚えています。

ピアノ演奏は苦手？苦慮しながらも子ども達が楽しく歌えるようにと練習を重ね、現在も奮闘中です。また、一方で、身体を動かすことは得意分野！園庭狭しと鬼ごっこやサッカーなど元気いっぱい動き回る先生の姿にあこがれる男の子達もいます。何より、子ども一人ひとりをよく見て、子どもの心に添った保育を心がけ、どんな小さな成長でも喜びと感じられる先生の姿勢が素敵です。

現在、瑞穂市立の保育所には4名の男性保育士が勤務しています。どの先生も、男性保育士ならではの感性で保育を教え、真摯に職務に向かっています。これからも、男性保育士と女性保育士がお互いの個性や能力を尊重し助け合い、瑞穂市の未来ある子どもたちの成長のために努力してほしいと願っています。